



Title	<翻訳> バビロニア創造神話Enuma Eliš (1)
Author(s)	福原, 信義
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 34, p. 59-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80558
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バビロニア創造神話 Enuma Eliš (1)

福 原 信 義

Enuma Eliš, the Babylonian Epic of Creation (1)

Nobuyoshi FUKUHARA

This is an attempt at Japanese translation of the Babylonian *Genesis* based on W. G. Lambert: *Enuma Eliš, the Babylonian Epic of Creation, the Cuneiform Text* (Oxford, 1966).

神が天地を創造しはじめたとき——地はまだ形なく、
むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水の
おもてをおおっていたのだが——神は「光あれ」と
言われた。すると光があった。（創世記1：1～3）

バビロニア創造神話 Enuma Eliš は、主人公マルドゥク神がティアマトを中心とする混沌の諸勢力との闘争に打ち勝ち、秩序を樹立するという宇宙起源をテーマとした宗教的叙事詩である。この詩は、新年祭 *akitu* において儀式の中心的役割を演じ、祭の四日目に祭司がこれを読誦し、宇宙生成を再現するならわしとなっていた。

本訳の定本は、W. G. Lambert: *Enuma Eliš, the Babylonian Epic of Creation, the Cuneiform Text* (Oxford, 1966) である。翻訳にあたっては、できる限り原文に忠実に訳すことを努めたから、文学的鑑賞に耐え得るものではないことをお断りしておく。なお、第六書版 121 行目以後の翻訳、訳註、関連資料は、紙面の都合で次号にまわすことにした。

第 一 書 版

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 上においては天が呼ばれず | れ出た |
| 2 下においては地が命名されず | 10 (先ず)ラフムとラハムが創られ、命名さ |
| 3 神々の種を蒔いた父なる太初アプスーと | れた |
| 4 諸神の生みの母なる混沌ティアマトの | 11 彼らは成長し、力逞しくなると |
| 5 水がひとつに混ざり合い | 12 次いでアンシャルとキシャルが生まれ出 |
| 6 葦家も編まれず、沼地も見えぬとき | て、彼らを凌いだ |
| 7 いずれの神も現われず | 13 日々を永らえ、年に年を加えた |
| 8 名づけられず、運命も定められていない | 14 彼らの息子アヌは父たちに並ぶもの |
| とき | 15 アンシャルは長子アヌをおのれに似せた |
| 9 その時、彼らの（水の）中に神々が生ま | 16 そしてアヌは自分の姿に似せてヌディン |

ムドを生んだ
17 ヌディンムド、彼こそ父たちを統る者
18 聰明にして、知恵に富み、力逞しく
19 父の父(=祖父)なるアンシャルより遙かに猛き者
20 兄弟なる神々のなかにも並ぶものがない
21 兄弟の神々は寄り集まって
22 ティアマトに無謀に振舞い、彼らの守人を苦しめ悩ました
23 ティアマトの腹中を攪乱した
24 『天の家』のただ中で大騒動を引き起こしては
25 アプスーは彼らの喧噪を鎮められず
26 ティアマトは彼らの前で黙り込んだ
27 彼らのやることなすことが彼女を煩わし
28 彼らの道は好ましいものではなかったが、
彼女は慈悲を垂れた
29 その時、大いなる神々の種を蒔いた父なるアプスーは
30 大臣ムンムに叫んで言った
31 「大臣ムンムよ、わが魂を喜ばす者よ
32 ここに参れ、さあティアマトの許に行こう」
33 彼らは進み行き、ティアマトの面前に坐ると
34 彼らの長子なる神々について言葉を交わした
35 アプスーが口を開いて
36 至高なるティアマトに語りかけた
37 「わたしには彼らの道が煩わしいものとなった
38 昼は休憩できず、夜は安眠できない
39 彼らの道を崩し滅ぼして
40 静寂を取り戻そう、そうして、われらは安らかに眠ろう」
41 ティアマトはこの事を聞くや
42 憤慨し、彼女の夫にどなりかけた
43 悲痛に呻き、ただひとり怒り狂い
44 腹中に邪惡を抱いた
45 「われらが創造したものを滅ぼすとは何

事か
46 彼らの道はわれらに煩わしいものだが優しくいたわってやろう」
47 ムンムは答えて、アプスーに向かって忠言した
48 大臣ムンムの忠告は好意の籠もったものではなかった
49 「父よ、乱れきった道を打ち壊せ
50 そうすれば、昼は安息できるし、夜は安眠することができる」
51 アプスーがこのことを聞くや、彼の顔は光り輝いた
52 彼の子なる神々に向って目論んだ凶事のゆえに
53 ムンムの首を抱きしめた
54 (ムンムは) ひざまづき、彼に接吻した
55 彼らの集会で、企んだ何事も
56 彼らの長子なる神々に繰り返し伝わった
57 この事を聞き及んで、神々はうろたえた
58 沈黙が彼らを捕え、啞のごとくに坐り込んだ
59 聰明にして、技にすぐれ、智謀に富む者
60 何事も知り尽くしたるエアは、彼らの陰謀を見抜くと
61 完璧な策略を確立し
62 圧倒的な聖なる呪文を巧みに編み出した
63 それを唱え、(アプスーの) 水の中に潜りこませ
64 眠りを注ぐと、彼はぐっすり眠った
65 眠りをかけられ、アプスーが眠らされてしまうと
66 相談役ムンムは齒向う力を喪失した
67 エアは(アプスーの) 帯を抜きとり、冠を外した
68 光輪を奪うと、自分に冠せた
69 アプスーを縛りあげて刺し殺した
70 ムンムを虜にして、その上に門をかけた
71 アプスーの上に住み家を建てた
72 ムンムに手綱を付けて取り押えた
73 悪敵を縛ると、踏みつけ

74 エアは仇敵の上に勝利を確立した
75 彼は室^{むろ}の中で平穩に休息した
76 (その室を) アプスーと名付け、聖域と
定めた
77 その場所には彼の御堂を築き
78 エアと妻ダムキナは壯麗のうちに宿った
79 その運命の奥院で、その宿命の内院で
80 勇者の中の勇者、神々の中で聖賢なる主
が生まれた
81 アプスーの中でマルドゥクが生まれた
82 聖なるアプスーのただ中でマルドゥクが
生まれ出た
83 彼を創造したのは父エア
84 彼を孕んだ母はダムキナ
85 女神たちの乳房をしゃぶり
86 彼をはぐくみ育てた保母は彼を威厳で満
した
87 その容姿は眩いばかり、その瞳は爛々と
光る
88 生まれながらの英雄、生まれながらの勇
士
89 父の父なるアヌがこれを見て
90 悦び輝き、心は歡喜に溢れた
91 二重の神威を彼に備え
92 神々の上に豊かに彼を崇^{たか}めた
93 彼の四肢の見事な出来ばえは想像を絶し
94 聞くに及ばず、見るをも凌ぐ
95 その目は四つ、その耳も四つ
96 その唇を動かせば、火焰が燃え上がる
97 四つの耳は大きくなり
98 それと共に(四つの)目も全てのものを
見通す
99 神々の中で至高なるもの、その姿は他を
圧倒するもの
100 彼の肢体の巨大なこと、その怪童ぶり
101 わが子ウトゥ、わが子ウトゥ
102 太陽の子、神々の太陽
103 十柱の神々の光輪を戴き、高貴を經い、
104 眩く輝く畏怖を彼の上に積み重ねた
105 アヌは四重の風を捲き起こしたり生み出

した
106 彼の掌中を仇敵の首領で満たした
107 塵^{ちり}を造り、旋風^{つむじ}を起こした
108 葦沼を配して、ティアマトを攪乱した
109 ティアマトはいきり立ち、昼も夜もおろ
おろし
110 神々とても安息できず、風に悩み苦し
んだ
111 彼らの肝は凶事を企み
112 彼らの母ティアマトに語って言った
113 「(エアが)あなたの夫アプスーを殺した
とき
114 あなたは彼の側に進まず、じっと静かに
坐ったままでいた
115 エアが恐怖の四重の風を捲き起こしたか
ら
116 あなたの心は攪乱され、われらは安眠で
きない
117 征伐された夫アプスーと
118 ムンムのことはあなたの心になかった
今やあなたはひとりぼっちになっ
たのだ
119 あなたは母ではない、あなたは乱れうろ
たえている
120 安息できないわれらをあなたは哀れもう
ともしない
121 [] われらの目は潰されてしまった
122 われらには衰弱^{じやくじやく}がすることが出来ない悪を
追っ払え、そうして安眠しよう
123 [] 彼らの親切を償^{かへ}ってくれ
124 [] それらを靈風の許へ追いやれ
125 ティアマトはこれを聞いた
その言葉^{ことば}が彼女を歡喜させた
126 「あなたが遣り取りしたもの」……さ
あ嵐を起こそう
127 [] その中の神々 []
128 彼らを創った神々に邪惡な戦を挑んだ
129 彼らは群がり、ティアマトの味方にと進
んだ
130 夜も昼も休むことなく怒りに燃えて

131 戦争の手立てを整え、吼えては荒れ狂っ
た
132 会議を開いて攻撃策を練った
133 万物の創造者たる母フブルは
134 無敵の武器を加え、ついには大蛇を生み
出した
135 その歯は鋭く、容赦ない牙を持つ
136 血の代わりに猛毒でその胴体を充たした
137 吼える龍には恐怖を鎧わせ
138 光輪を冠むせると、神々しく仕立てあげ
た
139 それらを見る者は驚愕のあまり死ぬよう
に
140 体軀をもたげ、背後を見ることがない
ようにした
141 毒蛇、巨龍、ラハムを
142 大獅子、狂犬、サソリ人を
143 獐猛な嵐、魚人、野牛を立ち起した
144 それらは仮借なき武器を持ち、戦の恐さ
知らずの者ども
145 彼女の決定は堅く、それに立ち向かうこ
とのでぬもの
146 この類の十一頭の怪物を造り出し
147 会議を開く長子なる神々の中から
148 キングを崇めて、彼らの首領とした

149 軍勢の統帥、会議の指導
150 武器の振り上げ、戦闘への突撃
151 戦争での総司令を
152 彼の掌中に委ね、彼を主座にのぼらせて
(言った)
153 「わたしはあなたに呪文をかけ、神々の
会議であなたを至高のものとした
154 諸々の神々の統率権をあなたの手に授け
た
155 真にあなたは至高なるもの、汝こそわた
しの唯一の夫
156 あなたの言葉はアヌナキたち全てより
も勝るもの」
157 彼女は彼に運命の牌を授け、彼の胸にし
っかと結びつけた
158 「あなたの命令は不変のもの、あなたの口
より出るものは確固不拔のもの」
159 キングが崇められ、アヌの位をものにす
ると
160 彼の子なる神々の運命を定めて言った
161 「あなたたちの口から出るものは炎すら
鎮める
162 あなたたちの激しい熱は強き者をうち従
える」

第 二 書 版

1 ティアマトは造作を頑強に成し遂げ
2 彼女の子孫なる神々への戦争を結んだ
3 アプスーの復讐を遂げんとティアマトは
悪を働いた
4 彼女が戦いの手立てを整えたことがエア
に暴露された
5 エアはこの話を聞くと
6 眩暈を起し、押し黙って坐り込んだ
7 やがて、深い熟慮の末、怒りは鎮まり
8 アンシャルの許へ赴いた
9 彼の父の父アンシャルの前にやって来る
と
10 ティアマトの目論んだことを何もかも彼

に話し伝えた
11 「父よ、われらが生みの母ティアマトは、
われらに憎しみを抱き
12 会議を開いて、猛り狂ってる
13 神々全てが彼女の回りをとり囲み
14 あなたが造り出したものまでも彼女の側
に赴いている
15 彼らは群がり、ティアマトの味方にと進
んだ
16 夜も昼も休むことなく怒りに燃えて
17 戦争の手立てを整え、吼えては荒れ狂っ
た
18 会議を開いて攻撃策を練った

19 万物の創造者なる母フブルは
20 無敵の武器を加え、ついには大蛇を生み
出した
21 その歯は鋭く、容赦ない牙を持つ
22 血の代りに猛毒でその胴体を充たした
23 吼える龍には恐怖を慍わせ
24 光輪を冠せると神々しく仕立てあげた
25 それらを見る者は驚愕のあまり死に
26 体軀をもたげ、背後を見ることがない
ようにした
27 毒蛇、巨龍、ラハムを
28 大獅子、狂犬、サソリ人間を
29 獐猛な嵐、魚人、野牛を立ち起した
30 それらは假借なき武器を持ち、戦の恐さ
知らずの者ども
31 彼女の決定は堅く、それに立ち向かうこ
とのできぬもの
32 この類の十一頭の怪物を造り出して
33 会議を開いた長子なる神々の中から
34 キングを崇めて、彼らの首領とした
35 軍勢の統帥、会議の指導
36 武器の振り上げ、戦闘への突撃
37 戦争での総司令を
38 彼の掌手に委ね、彼を主座にのぼらせて
(言った)
39 『わたしはあなたに呪文をかけ、神々の
会議であなたを至高のものとした
40 諸々の神々の統率権をあなたの手に授け
よう
41 真にあなたは至高なるもの、汝こそわた
しの唯一の夫
42 あなたの言葉はアヌナキたち全てより
も勝るもの』
43 彼女は彼に運命の牌を授け、彼の胸にし
っかと結びつけた
44 『あなたの命令は不変のもの、あなたの
口より出るものは確固不拔の
もの』
45 キングが崇められ、アヌの位をものにす
ると

46 彼の子なる神々の運命を定めて言った
47 『お前たちの口から出るものは炎すら鎮
める
48 お前たちの激しい熱は強き者をうち従え
る』
49 [アンシャルはティアマト] が全く悩ん
でいるのを聞いて
50 [腿を叩き] 唇を咬んだ
51 [心は重く、] 気持は落ち着かなかった
52 長子エアは口の中に呻きを押えて言った
53 「[あなたが] 戦闘を挑め
54 あなたの手が作った[(武器)]を取り上
げよ
55 あなたは [ムンムと] アプスーを殺害し
たではないか
56 [怒り狂うティアマトの] 前にのぼり行
け
57 聰明なる []
58 [] スディンムド
59 []
60 [エアは] 口を [開いて (言った)]
61 [あなたは] 遙かなる [心(の主)], 運命
の決定者
62 創造も滅亡もあなたの許にある
63 [アンシャルは遙かなる心(の主)], 運命
の決定者
64 創造も滅亡もあなたの許にある
65 あなたの言うことは []
(66~70 破損)
71 アンシャルがそれを聞くと、言葉が彼を
悦ばせた
72 彼の心を運んで、エアに言った
73 「あなたの[魂は] 神々しく []」
(72) 彼の息子 [アヌへ] 言葉を語った
(73) 「[] 神々しき勇士の武器 []」
(74) その勢力たるや群を抜き、その攻撃は比
類なき者
(75) さあ行け、ティアマトの前に立て
(76) 彼女の彼気持が鎮められ、女の心が宥め
られる

(77) 彼女があなたの言葉を聞き入れなければ
(78) われらの言葉を宣べ、彼女が宥められる
ようにせよ」
(79) 彼の父アンシャルの命令を聞くと
(80) 彼女への路をかたく守り、その道筋を辿
った
(81) アヌは進み行くとティアマトの企みを目
の当りにして
(82) 「彼女に立ち向うことが出来ずに」引き
返えした
(83) 「[みじめに] 父アンシャルの許へ[帰り
着いた]」
(84) 「[ティアマトに言うが如くに] 彼に語っ
て聞かせた
(85) 「わたしの手はあなたをうち従えには充
分に強くない」
(86) アンシャルは黙り込んで地面をじっと見
つめた
(87) エアに向かって歯ぎしりして頭を振った
(88) 天の神タイギギらは一同に寄り集まって
(89) 唇を閉じ、沈黙して坐り込んだ
(90) いずれの神とて（ティアマトに）対抗出
来ない
(91) ティアマトの前では生き長らえない
(92) 大いなる神々の父なる主アンシャルは
(93) ?
(94) 「父たちの復讐者にして英雄なる息子
(95) [戦いにたけたる者] 英雄マルドゥクよ」
(96) エアはマルドゥクを秘密の場所に呼び出
して
(97) 相談し、彼の心を打ち明けた
(98) 「マルドゥクよ、あなたの父の伝言に耳
を傾けよ
(99) あなたこそ、彼の心を甦らせる者
(100) アンシャルの前に進み寄り、彼に向かっ
て起立せよ
(101) 口を開いて立ち上れ、彼はあなたを見て
心が安らぐだろう」
(102) 主は彼の言葉に喜こんだ
(103) （アンシャルの許へ）やって来ると、そ

の前に立った
(104) アンシャルが彼を見て、心は歓喜に満ち
溢れた
(105) 彼の唇に接吻すると、彼の恐怖は消え去
った
(106) 「父よ、黙り込まずに口を開いて下さい
(107) わたしが進み行き、あなたの心にあるこ
とを全て成し遂げましょう
(108) アンシャルよ、沈黙を止めて、口を開い
て下さい
(109) さあ、行こう、あなたの心にある全ての
望みを成し遂げましょう
(110) あなたに向って戦闘を挑む男は誰か
(111) 武器を背負ってあなたに挑むは、たかが
女のティアマト
(112) 創造主なるわが父よ、悦べ、歓喜せよ
(113) ティアマトの首級は、間もなくあなたが
踏み躪る
(114) 創造主なるわが父よ、悦べ、歓喜せよ
(115) ティアマトの首級は、間もなくあなたが
踏み躪る」
(116) 「いざ進め、全ての知恵を知り尽くした
わが子よ
(117) 聖なる呪文を唱えて、ティアマトを鎮め
よ
(118) 嵐の戦車を全速力で疾走させよ
(119) 彼女の許からあなたを追い返さない、あ
なたは彼らに決して背を向けな
い」
(120) 父の言葉に主は喜んだ
(121) 彼の心は歓喜に高ぶり、父に語って言っ
た
(122) 「神々の主よ、大いなる神々の運命よ
(123) もし、わたしが真にあなたたちの復讐者
となり
(124) ティアマトを滅ぼし、あなたたちを生き
長らえさすということなら
(125) 会議を開いて、わたしの運命を至高のも
のと言明してください
(126) あなたたちが挙って歓喜に満ち、ウプシ

- ユキンナに参列するときには
(127) あなたたちの代りにわたしの口に運命を
決定させてください
(128) わたしが創造するものは何とて変ること

- なく
(129) わたしの口から出る命令は空しくならず、
変更されないように」

第三書版

- 1 アンシャルは口を開いて
2 大臣ガガに言葉を言った
3 「大臣ガガ、わが心を悦ばす者よ
4 ラフムとラハムの許にあなたを遣わそう
5 あなたは策謀に闇け、雄弁を会得してい
る
6 父なる神々をわたしの前に来させよ
7 全ての神々をここへ参らせよ
8 舌鼓をうって饗宴の席に着かせて
9 パンを食べて酒を注ぎ交わせよ
10 (そこで) 彼らの復讐者マルドックのた
めに運命を決定させよ
11 ガガよ、さあ立ち上り進み行け、彼らの
前に立て
12 わたしがあなたに語ることを彼らに繰り
返せ
13 『あなたたちの長子アンシャルがわたし
を遣わして
14 わたしが彼の内秘な伝言を語り伝えるよ
うに託した
15 「われらが生みの母ティアマトは、われ
らに憎しみを抱き
16 会議を開いて、猛り狂っている
17 神々全てが彼女の回りをとり囲み
18 あなたが造り出したものまでも彼女の側
に赴いている
19 彼らは群がり、ティアマトの味方にと進
んだ
20 夜も昼も休むことなく怒りに燃えて
21 戦争の手立てを整え、吼えては荒れ狂っ
た
22 会議を開いて攻撃策を練った
23 万物の創造者たる母フブルは
24 無敵の武器を加え、ついには大蛇を生み

- 出した
25 その歯は鋭く、容赦ない牙を持つ
26 血の代わりに猛毒でその胴体を充たした
27 吼える龍には恐怖を慄わせ
28 光輪を冠むらすと神々しく仕立てあげた
29 それらを見る者は驚愕のあまり死ぬよう
に
30 体軀をもたげ、背後を見せることのない
ようにした
31 毒蛇、巨龍、ラハムを
32 大獅子、狂犬、サソリ人間を
33 獰猛な嵐、魚人、野牛を立ち起こした
34 それらは仮借なき武器を持ち、戦の恐さ
知らずの者ども
35 彼女の決定は堅く、それに立ち向かうこ
とのできぬもの
36 この類の十一頭の怪物を造り出して
37 会議を開く長子なる神々の中から
38 キングを崇めて、彼らの首領とした
39 軍勢の統帥、会議の指導
40 武器の振り上げ、戦闘への突撃
41 戦争での総司令を
42 彼の掌中に委ね、彼を主座にのぼらせて
(言った)
43 『わたしはあなたに呪文をかけ、神々の
会議であなたを至高のものとした
44 諸々の神々の統率権をあなたの手に授け
よう
45 真にあなたは至高なるもの、汝こそわた
しの唯一の夫
46 あなたの言葉はアヌナキたち全てより
勝るもの』
47 彼女は彼に運命の牌を授け、彼の胸にし
っかと結びつけた

48 『あなたの命令は不変のもの、あなたの
口より出るものは確固不拔の
もの』
49 キング崇められ、アヌの位をものにす
と
50 彼の子なる神々の運命を定めて言った
51 『お前たちの口から出るものは炎すら鎮
める
52 お前たちの激しい熱は強き者をうち従え
る
53 アヌを差し向けたが、彼は彼女に立ち向
かうことができなかった
54 スディンムドは戦き、後に退いた
55 神々の賢者にしてあなたたちの子マルド
ックが進み出た
56 彼の心はティアマトに立ち向かうよう彼
を促した
57 彼は口を開いてわたしに宣べた
58 『もし、わたしが真にあなたたちの復讐
者となり
59 ティアマトを滅ぼし、あなたたちの生命
を救うということなら
60 会議を開いて、わたしの運命の至高なる
ことを宣言してください
61 ウプシュキンナに一同陽気に坐るとき
62 あなたたちの代わりに、わたしの言葉に
運命を決定させてください
63 わたしが創造するものは何とて変わるこ
とのないように
64 わたしの口の命令は空しくならず、変更
されることもないように』
65 さあ急ぎ来て、あなたたちの運命を早急
に決定し
66 マルドックが進み行き、あなたたちの強
敵に立ち向かうようにせよ」
67 ガガは出発し、彼の道筋を辿った
68 父なる二柱の神ラフムとラハムの許で
69 彼らの前に平れ伏し、地に接吻し
70 身を起こして立ち上ると彼らに語って言
った

71 「あなたたちの長子アンシャルがわたし
を遣わして
72 わたしが彼の内秘な伝言を語り伝えるよ
うに託しました
73 『われらが生みの母ティアマトは、われ
らに憎しみを抱き
74 会議を開いて、猛り狂っています
75 神々全てが彼女の回りを囲み
76 あなたが造り出したものまでも彼女の側
に赴いています
77 彼らは群がり、ティアマトの味方にと進
んだ
78 夜も昼も休むことなく怒りに燃えて
79 戦争の手立てを整え、吼えては荒れ狂っ
た
80 会議を開いて攻撃策を練った
81 万物の創造者なる母フルは
82 無敵の武器を加え、ついには大蛇を生み
出した
83 その歯は鋭く、容赦ない牙を持つ
84 血の代わりに猛毒でその胴体を充たした
85 吼える龍には恐怖を鑑わせ
86 光輪を冠むらすと神々しく仕立てあげた
87 それらを見る者は驚愕のあまり死ぬよう
に
88 体軀をもたげ、背後を見せることがない
ようにした
89 毒蛇、巨龍、ラハムを
90 大獅子、狂犬、サソリ人間を
91 獐猛な嵐、魚人、野牛を立ち起こした
92 それらは仮借なき武器を持ち、戦の恐さ
知らずの者ども
93 彼女の決定は堅く、それに立ち向かうこ
とのできぬもの
94 この類の十一頭の怪物を造り出して
95 会議を開く長子なる神々の中から
96 キングを崇めて、彼らの首領とした
97 軍勢の統帥、会議の指導
98 武器の振り上げ、戦争への突撃
99 戦争での総司令を

100 彼の掌中に委ね、彼を主座にのぼらせて
（言った）
101 「わたしはあなたに呪文をかけ、神々の
会議であなたを至高のものとした
102 諸々の神々の統率権をあなたの手に授け
よう
103 真にあなたは至高なるもの、汝こそわた
しの唯一の夫
104 あなたの言葉はアヌナキたち全てより
勝るもの」
105 彼女は彼に運命の牌を授け、彼の胸にし
っかと結びつけた
106 「あなたの命令は不変のもの、あなたの
口より出るものは 確固不拔 のも
の」
107 キングが崇められ、アヌの位をものにす
ると
108 彼の子なる神々の運命を定めて言った
109 「お前たちの口から出るものは炎すら鎮
める
110 お前たちの激しい熱は強き者をうち従え
る」
111 わたしはアヌを遣わしたが、彼は彼女に
立ち向かうことができなかった
112 ヌギンムドは恐れ戦き、退脚した
113 神々の賢者なるあなたたちの息子マルド
ックが進み来た
114 彼の心はティアマトと対決するよう彼を
促した
115 彼は口を開いて言った
116 「もし、わたしが真にあなたたちの復讐
者となり
117 ティアマトを滅ぼし、あなたたちを生き
長らえさせるということなら

118 会議を開いて、わたしの運命を至高のも
のと宣言してください
119 あなたたちが歓喜に満ちて、ウプシュキ
ンナに参列する時に
120 あなたの代わりに、わたしの口に運命を
決定させてください
121 わたしが創造するものは何とて変わるこ
となく
122 わたしの口から出る命令は空しくならず、
変更されぬように」
123 さあ急ぎ来て、あなたたちの運命を早急
に決定し
124 彼が進み行き、あなたたちの強敵に立ち
向かうようにせよ」
125 ラフムとラハムはこのことを聞くや、叫
び声を張りあげた
126 イギギたちは挙って悲痛な呻き声をもら
した
127 「彼らがこんな決定を下したとは何たる
不思議
128 われらはティアマトの行動を理解できな
い」
129 運命を定める大いなる神々は皆
130 出かけやって来た
131 アンシャルの前に入って〔ウプシュキン
ナを〕一杯にした
132 会議で彼らは互いに接吻を交わし
133 舌鼓を打ちながら饗宴の席に坐った
134 パンを食べ、酒を注いだ
135 美しき酒を彼らの盃に注いだ
136 強き酒を飲むほどに彼らの腹は脹れ
137 ひどく大胆になり、彼らの魂は昇った
138 そこで彼らは彼らの復讐者マルドックの
ために運命を決定した

第 四 書 版

1 神々はマルドックに主権の高座たかみくらを設えた
2 マルドックは父たちの面前で王位につい
た

3 「大いなる神々の中であなたは崇められ
る
4 あなたの運命は比類なきもの、あなたの

命令はアヌのもの

- 5 マルドックよ、大いなる神々の中であなたは崇められる
6 あなたの運命は比類なきもの、あなたの命令はアヌのもの
7 この日より、あなたの命令は変わることなく
8 上げるも下げるもあなたの掌中のもの
9 あなたの口から出るものは実^{まこと}となり、あなたの言葉は空^{あだ}なることなく
10 神々の誰とてあなたの領域を侵すことなし
11 神々の聖所を管理することが求められるから
12 神々の御堂の位置をあなたの場所とせよ
13 マルドックよ、あなたこそわれらが復讐者
14 われらはあなたに諸々の国々の覇権を授けよう
15 会議の席に列なれば、あなたの言葉は崇^{たか}められる
16 あなたの武器はしくじることなく、仇敵を打ち砕く
17 主よ、あなたを頼みとする者の生命を守りたまえ
18 悪を抱く神の生命を引き抜きたまえ」
19 神々は彼らの中央にひとつの星を置いて
20 彼らの長子マルドックに語って言った
21 「よ主、あなたの運命は神々の内で第一級のもの
22 滅亡と創造を命ぜよ、(そうすれば)そのようになる
23 さあ、口を開いて星を消し
24 再び命じて星をもとに戻してみよ」
25 そこでマルドックが命令を下すと、彼の言葉に星は消えた
26 再び命令を下すと、星は現われた
27 父なる神々は彼の口から出るものの威力を目のあたりにし
28 悦び、誉め称えて叫んだ「マルドックは

王なり」

- 29 彼らは王笏と王座と標章を彼に授けた
30 敵を蹴散らす無敵の武器を彼に与えて言った
31 「いざ進め、ティアマトの生命を絶て
32 風に彼女の血汐を秘密の場所へさらい去らせたまえ」
33 父なる神々の主の運命を定め
34 安全と成功の道を歩ませた
35 彼は弓を作り、自分の武器とし
36 矢を番え、弓弦^{ゆづる}をかけた
37 棍棒をとり上げ、右手に握りしめ
38 弓と矢筒を腰にしっかりと結びつけた
39 面前には稲妻をつけ
40 燃え盛る火焰でその身を充した
41 ティアマトを包み捕る網を編み
42 彼女の何ものも逃げのびないように
43 南風、北風、東風、西風
44 これら四方の風を(網の縁に)配置して
45 父アヌからの贈物なるその網を脇に手繰りかかえた
46 更には、悪の風、大旋風、台風
47 四重の風、七重の風、邪風、無敵の風をと捲き起こし
48 立ち上らせた風七つを喚けた
49 ティアマトの内を攪乱しようと、彼の背後に位置についた
50 主は洪水を起こして大いなる武器とした
51 身の毛もよだつ無敵の嵐の戦車に乗った
52 四頭を一つに軛をかけてつないだ
53 虐殺するもの、無慈悲なるもの、蹴散らすもの、飛翔するものを
54 唇をかつと開き、その齒は猛毒を持ち
55 疲れ知らずで破壊のみを心得たものどもを
56 (更に) 右には壮烈な戦争と闘争を
57 また左には諸々の陰謀者を撃ち倒す戦闘を配置した
58 自からは、恐怖の鎧に身を包み
59 壮麗な光輪を頭上に戴いて

59 道筋を真っすぐ辿って進軍した
60 猛り狂うティアマトへ顔を向けるや
61 唇に呪文を唱え
62 手に毒消し草を握りしめた
63 その時、神々は彼の周囲を右往左往した
64 父なる神々は慌てふためいた、神々はう
ろたえた
65 主は近づくと、ティアマトの内を見抜き
66 夫キングの策略を調べ尽くした
67 マルドックが彼を睨み付けると、彼の忠
告は乱れた
68 彼の思考は崩れ、行動は混乱に陥った
69 援軍の神々は彼の脇に付き従ってきたが
70 その勇敢なる英雄を見ると、目が眩んだ
71 ティアマトは呪文を投げかけ、首を返さ
なかった
72 莽猛な唇には、挑戦の言葉を強めた
73 「神々の主はお前に立ち向かった
74 彼らの場所に集ったのか、それともお前
の場所にか」
75 そこで、主は大いなる武器なる洪水を起
こして
76 怒り狂ったティアマトへ告げて言った
77 「何故に上において善行を荒廃させ
78 お前の心の中で戦争を企んだのか
79 息子たちはわめきあっては、父たちに歯
向かうのか
80 彼らの生みの母なるお前は、慈愛を絶っ
た
81 キングをおのれの夫に選び出し
82 アヌの位にその運命にない彼をつけた
83 神々の王アンシャルに向けて悪事を迫り
求め
84 わが父なる神々へ凶事を強めては、
85 お前の軍勢を（戦争に）喚け、お前の武
器を運びさせた
86 いざ立ち上れ、わたしとお前で一騎打ち
に罷り出よう」
87 これを聞いてティアマトは
88 狂乱し、放心した

89 憤怒して、ティアマトは叫び声を張りあ
げた
90 足元まで両脚はわなわな震えた
91 呪文を唱え、呪いをかけ続けた
92 戦争の神々は自分の武器を磨ぎ澄ました
93 ティアマトと神々の賢者マルドックが組
み合い
94 一騎打ちに縫れ^{もつ}合い、互いに撃ち合った
95 主は網を広げてティアマトを捕え包むと
96 彼の背後に続く悪風を彼女の^{もつ}前へ解き放
った
97 彼を呑み込まんとティアマトは口を開い
た時をすかさず
98 悪風を彼女に向けてけしかけ、唇が閉ま
らぬようにした
99 強風が彼女の腹に充滿した
100 彼女の胴体は脹れ上り、口はあんぐと開
いたまま
101 時を移さず、彼が矢を放つと、矢は彼女
の腹を裂き
102 内臓をずたずたにして、心臓を貫いた
103 彼女を捕り押えると命を奪った
104 屍を薙ぎ倒し、その上に立ちあがった
105 先頭を進軍して来たティアマトを打ちの
めしたのだ
106 彼女の軍団は蹴散らされ、彼女の軍隊は
乱れた
107 彼女の脇を進んで来た援軍の神々は
108 恐怖に震え、彼らの道を退却した
109 彼らは逃げ惑い、生命を救おうと
110 逃げまわるが、逃れることが出来ない
111 彼らを捕虜とし、武器を打毀した
112 網の中に投げ込まれ、虜になった
113 牢獄に閉じ込められると、そこにわめき
声が充滿した
114 彼の激怒に耐え忍びながら、虜となった
115 恐怖を鎧った十一頭の怪物
116 彼女の右手に付き従った邪悪なものども
全てに
117 網を付け、手は鎖で縛った

118 満身の憎しみを込めて彼らを足下に踏み
にじった
119 彼らの中で首領となったキングを
120 しっかりと縛り上げ、死せる神々のうちに
数えた
121 彼が持つ運命にない運命の牌を彼から奪
うと
122 それに自分の封印を押し、胸に結び付け
た
123 仇敵を捕縛して踏みにじると
124 打ち^{ぶし}拉^ひがれた敵を〔 〕
125 アンシャルの勝利を仇敵の上に完全にう
ち立てた
126 英雄マルドゥクはヌディンムドの望みを
成就した
127 捕えた神々への彼の拘束を頑強にすると
128 捕縛したティアマトの所へ引き返し
129 主はティアマトの背後を踏みつけ
130 容赦ない棍棒で彼女の脳天を打ち砕いた
131 血の管をずたずたに引きちぎり

132 (その血を) 北の風が秘密の場所へさら
って行った
133 父たちはこれを見て喜び、歓声をあげ
134 敬意の貢物を彼の許に持って来た
135 主は休んで、彼女の死骸を調べた
136 胴体を分け、^{うま}巧いものを創造した
137 彼女を貝のごとく二身に裂いて
138 その半分を(高く)あげて蒼穹とした
139 それに門をかけ、見張りを立てて
140 彼女の水が漏れることのないように命じ
た
141 天を渡って場所を調べ
142 ヌディンムドの住み処をアプスーの向か
いに定めた
143 主はアプスーの構造^{つくり}を測って
144 それに似せて大いなる宮エシラを置い
た
145 彼が成した大いなる宮エシラを
146 アヌとエンルルとエアとを彼らの場所に
住まわせた

第五書版

1 マルドゥクは大いなる神々のために座を
設え
2 星々を(神の姿に)似せて星座とし、(そ
こに)配置した
3 年を定め、その境を引いた
4 十二の月々のそれぞれに三つの星を振り
当てた
5 年の時節を分ける境界を引いたあと
6 星々の領界を定めるために北斗星の座を
取り付けた
7 (それは星々の)どれとて(運行を)怠
けたり、間違えたりしない(ため
である)
8 彼は北斗星と一緒にエアとエンリルの座
を強めた
9 (天の)両側に門を開いて
10 左と右に門をしっかりと掛けた
11 マルドゥクはティアマトの腹に天頂を置

いて
12 月を現わして、それに夜を委ねた
13 (一月の)日々を定めるために夜の標章
を授けた
14 それぞれの月を月の冠で絶えずしるし表
わした
15 「新月が地上を照らす時に
16 六日の日々を定めるためには(三日月
の)角をつけて輝き
17 七日目には冠の半分を載け
18 十五日^{シヤバトラ}目には(前後の)半月が等しくな
れ
19 それから、太陽が天の^{もと}基でお前に出会う
とき
20 次第に欠けて、後退せよ
21 (お前が)消えた日には、太陽の道に近
づき
22 〔 〕三十日目には太陽と等しくなり、

第二（の月）となれ
23 わたしはしるしを示した
さあ、その道筋を辿れ
24 お前たち二人が〔 〕に近づいた時に
は、審判を下せ
25 〔正義を為して〕不法な審判〔を下すな〕
（26～44、破損がひどく解読不可能）
45 マルドックは〔太陽に〕日々を委ねたそ
の後で
46 夜と昼との境を〔引いた〕
47 ティアマトの唾を集めて
48 マルドックは〔 〕を創造した
49 雲を結び合わせて水にして流した
50 風を起こしたり、雨を降らしたり、冷や
したり
51 霧を立ち昇らせたり、彼女の毒唾を集め
積んだりすることを
52 おのれ自身に割り当て、自分の掌中に収
めた
53 ティアマトの頭を置き、その上に〔山を〕
盛り上げた
54 泉を開いて奔流を流した
55 彼女の目を開いてユーフラテスとティグ
リス（の双子河を流した）
56 鼻の穴を塞いで水を貯えた
57 乳房の上に高い山を積み上げ
58 （乳首に）井戸を掘って、水流を導き出
した
59 彼女の尻尾を折り曲げて、大いなる臍に
結びつけた
60 〔 〕アプスーを彼の足下に〔 〕
61 彼女の股を〔 〕天を締め
62 〔空には〕蒼穹を張り、地は固められた
63 〔 〕ティアマトの胎を流して
64 〔 〕彼の網を全く取り外した
65 かくて、天地を創造し〔 〕
66 〔 〕彼らの領界〔 〕して、確固
たるものとした
67 業を成し遂げ、秩序を確立して
68 手網を付け、エアに握らせた

69 キングから奪い取った運命の牌を持って
来ると
70 最初の貢物として、アヌに捧げた
71 戦争の弓をだらりと下げ、散り散りにな
った神々を
72 〔ひとつに縛り〕父たちの前へ引き出し
た
73 ティアマトが創り出した十一匹の怪物と
〔 〕
74 彼らの武器を毀し、足枷をはめ捕虜とし
た
75 マルドックは彼らの像を造って、アプス
ーの門に置き
76 （言った）「これは決して忘れられるこ
とのないしるしとなれ」
78 ラフムとラハムをはじめ諸々の父祖たち
77 神々が彼を見るなり、彼らの内は歓喜に
沸いた
79 王アンシャルが彼の許に参上し、挨拶を
宣べ
80 アヌとエンリルとエアが彼に土産物を捧
げた
81 〔 〕彼の母ダムキナは彼を憐れみ
82 贈物を送って、彼の顔を光り輝かせた
83 彼女からの貢物を秘密の場所へ運んだウ
スムに
84 アプスーの大臣の権限、（エリドゥの）聖
所の管理を委ねた
85 深淵イギギたちは寄り集まり、挙って彼
に平れ伏した
86 アヌンナキたちもいるだけ皆が彼の足に
口付けした
87 彼ら全てがひとつになって敬意を表わし
88 〔彼の前に〕立っては平れ伏し（叫んだ）
「彼こそ王なり」
89 〔 〕父なる神々が彼の魅力に満足し
た
90 〔 〕戦闘の塵に被われた〔 〕
91 〔 〕彼らは彼に服従した
92 香柏の木で〔 〕彼の体を〔 〕清め

93 大いなる衣を纏った
94 覇王の光輪や畏怖の冠などを身につけた
95 棍棒を取り上げ、右手に握った
96 [左] 手に握りしめた
97 [] 覇王の光輪に []
98 棍棒を取り上げ[右手に握り]
99 [武器を背] 負った
100 繁栄と平安の笏を脇に結びつけた
101 光輪が [] 後で
102 後の編み服 [] アプスーを []
103 彼は坐り []
104 [至高の] 座なる彼の玉座に []
105 彼の閭で []
106 いるだけ全ての神々が []
107 エアとダムキナ []
108 彼らは口を開いて大いなる神タイギギに
語った
109 「かつて、マルドゥクはわれらが愛する
息子
110 「今や、彼はあなたたちの王
いざ、彼の称号を唱えよ」
111 彼ら挙って唱えて言った
112 「ルガルディンメランキア（天地の神々
の王）が彼の称号、彼をこそ頼み
とせよ」
113 彼らがアルドゥクに王権を授け
114 幸運と安泰の祝辞を彼に口上した
115 「この日よりあなたはわれらが聖所の守
人となれ
116 あなたの命ずる事は何とてわれらが成し
遂げる」
117 マルドゥクは口を開いて言った
118 父なる神々へ言葉を語った
119 「あなたたちが住みなれた場所、アプス
ーの上に
120 あなたたちの上にわたしが建て
121 下では敷き地の土を固めたエシラとそ
っくりなもの
122 （そんな）家を建てて、わが魅惑の住み
家としよう

123 その中に聖域を設立して
124 室を設け、わが王権を確立しよう
125 あなたたちがアプスーから会議に上って
来た時は
126 あなたたち全てを迎える夜の宿となる
127 天より会議に下って来た時は
128 あなたたち全てを迎える夜の宿となる
129 わたしはその名をバビロン『大いなる神
々の家』と呼ぼう
130 わたしはそれを大工の技を尽くして建て
よう」
131 父なる神々はこの話を聞いて
132 [長子] マルドゥクに尋ねた
133 「あなたの手が創造した諸々のものの上
に
134 あなたの〔法権を持つのは〕誰か
135 あなたの手が創造した地の上に
136 あなたの〔権能を持つのは〕誰か
137 吉運の名を付けたバビロン
138 そこに、われらが永遠の住み家を建てよ
139 日々の糧をわれらにもたせよ
140 [あなたの] 法〔権を〕われらが〔手に
委ねよ〕
141 [われらが成したる] 業を誰にとて〔侵
害させるな〕
142 そこに [] 労働の []」
143 [マルドゥクは彼らの言葉に] 喜び
144 [彼に問い尋ねた神々に] 答えた
145 [ティアマトを] 殺した者が彼らに光明
を見せるのだ
146 彼が〔口を〕開くと、彼の〔言葉は王者
のものとなった〕
147 「彼らに〔あなたたちの日々の糧をもた
らせよう〕
148 [わが法権は] あなたたちの掌中に委ね
られる」
149 神々は彼の前に平れ伏し宣べた
150 彼らは主ルガルディンメランキアに語っ
た
151 「かつて、主は〔われらが愛する〕息子

152 今や、彼はわれらが王〔 〕
153 その〔聖なる呪文〕がわれらの生命を救
った者

154 光輪と棍棒と王笏の〔主 〕
155 全ての技〔を極めたエアが〕
156 企てを成し、われらが石工となる」

第 六 書 版

1 マルドックは神々の話を聞くと
2 彼の心は巧い物の創造に彼を駆り立てた
3 彼は口を開いて、エアに話した
4 心に巡らした企てをエアに語った
5 「わたしは血を寄せ固めて骨を造ろう
6 原人を立たせて、その名を『人』としよ
う
7 原人『人』を造り
8 神々の労役を彼に振り当て、彼らが安息
できるようにしてやろう
9 神々の道を巧みに変更してやろう
10 彼らはひとつに崇め尊ばれても、二つに
分けられる」
11 エアは答えて彼に言葉を語った
12 神々を休息させるため彼の企てを変更さ
せた
13 「彼らの兄弟のひとりを寄越し
14 彼が滅ぼされ、それから人間が造り出さ
れるように
15 大いなる神々を一堂に集わせ
16 罪あるものを来させて（残りの）彼らは
生き長らえるようにせよ」
17 マルドックは大いなる神々を召集し
18 優しく命じ、指示を与えた
19 神々は彼の口から出るものに従った
20 王はアヌナキたちに言葉を語った
21 「あなたたちのかつての陳述が真ならば
22 わたしに誓って真実の言葉を宣べよ
23 戦争を起こしたのは誰か
24 ティアマトを喰かして戦闘を結んだのは
誰か
25 戦争を起こした者を引き渡せ
26 その罪を滅ぼし、あなたたちを平安に住
ませよう」
27 大いなる神々イギギたちは答えた

28 「神々の顧問役にして彼らの主なるルガ
ルディンメランキアよ
29 戦争を引き起こしたのはキングだ
30 ティアマトを喰かして戦闘を結んだの
だ」
31 彼らはキングを縛り上げ、エアの面前で
取り押えた
32 彼に罪を着せると、血を流し出し
33 その血汐で人間を造り出した
34 神々の労役を彼に課し、神々を自由にし
た
35 聰明なるエアが人間を創造してから
36 神々の労働を彼らに振り当てた
37 その業たるや理解の及ばぬこと
38 マルドックの旨い（企て）に従ってヌデ
ィンムドが成就したのだ
39 神々の王なるマルドックは
40 アヌナキたち全てを上と下とに分けた
41 彼らをアヌに委ね、彼の命令を守らせた
42 三百を天に配置して見張りとした
43 地の道を変えて、（新たに）しるしを引
いた
44 天地に（合わせて）六百（のアヌナキ
たち）を住ませ
45 全ての律法を發布して
46 天地のアヌナキたちに彼らの分を割り
当てた
47 アヌナキたちは口を開き
48 主なるマルドックに語った
49 「さて、主よ、われらを許した御方よ
50 あなたの前では、われらの善行とは何か
51 われらは聖所を建てよう、その名が
52 『室はわれらが夜の臥所、いざその中で
憩わむ』と呼ばれる（聖所を）
53 その場所が盛り上った聖所を建てよう

54 われらがやって来る日には、その中で休
む」
55 マルドックがこれを聞くと
56 彼の顔は昼間のように光り輝いた
57 「あなたたちが願った仕事、バビロンを
建てよ
58 その煉瓦が作られよ
そこを『聖所』と命名せよ
59 アヌナキたちは鍬を打ち振り働いた
60 一年目は煉瓦を焼いた
61 二年目がやって来ると
62 エサギラの頂をアプスーと等しく高めた
63 アプスーの高さに聖塔を積み上げ
64 (そこに) マルドックとエンリルとエア
のために家を建て住み処とした。
65 彼は堂々たる威厳を持って彼らの前に坐
った
66 (聖塔の) 双角からエシャラの^{ちよい}基を彼ら
は見た
67 エサギラの仕事を成し遂げた後で
68 アヌナキたち全てが自分たちの聖所を
建てた
69 天のイギギ三百柱とアプスーのイギギ六
百柱が挙って集まった
70 彼らが建て彼の住み処としたその高座に
坐る主は
71 父なる神々を饗宴の席に着かせた
72 「これぞバビロン、あなたたちの愛する
住み処
73 そこで楽を奏で、心ゆくまでその歡喜に
浸れ」
74 大いなる神々が居並ぶと
75 酒壺を置き、御馳走についた
76 その中で楽を奏でた後で
77 輝かしきエサギラで犠牲を捧げた
78 (予言の) 徴、それら全ての前兆が確立
された
79 天と地の座を諸々の神々に割り当てた
80 五十柱の大いなる神々が座に着いた
81 運命の神々七柱が決定を確立した

82 主はおのが武器なる弓を取り上げ、それ
を彼らの前に置いた
83 彼の作った網を父なる神々が眺めた
84 その弓のいかに美事な造作かを見ては
85 父たちは彼の成した業を賞讃した
86 アヌは(その弓を)取り下げると神々の
会議で語って
87 弓に口づけした、「これはわが娘」
88 その弓の名を呼んで言った
89 「『長き樹』が第一の名、第二の名は『征
服者』
90 第三の名はわたしが空で輝かす『弓星』」
91 弓の位置を兄弟なる神々と一緒に確立し
た
92 アヌが弓の運命を定めた後で
93 神々の前に至高なる王座を置いた
94 アヌは神々の会議の中に弓を安置した
95 大いなる神々は寄り集まって
96 マルドックの運命を讃美し、彼に平れ伏
した
97 彼ら自身へは呪いを唱え
98 水と油とに掛けて誓っては咽に手をやっ
た
99 神々の王権の行使を彼に授けた
100 天と地の神々の宗主たる位に彼を着かせ
た
101 至高なるアンシャルは彼をアサルヒと命
名した
102 「彼の称号を唱えてお辞儀せよ
103 彼の口から出るものに神々は注意を払え
104 彼の命令が上においても下においても至
高のものとなれ
105 われら全ての復讐者なる子が崇められ
106 彼の主権が卓越したもの、比類なきもの
となれ
107 彼が創造した頭の黒き者の飼主となり
108 世の終りまで忘れることなく、彼らに彼
の道筋を唱えさせよ
109 父たちのために大いなる供え物を確立さ
せよ

110 彼らに（父たちを）扶養させ、彼らの聖
所を堅牢にさせよ
111 彼が芳香を昇らせ、彼らの呪文を〔 〕
112 彼が天に成就したと同じものを地にもあ
らしめ
113 頭の黒き者が彼を敬うよう命じるように
114 神々に呼びかけることを人間たちが心に
留めているように
115 彼の口より出るもので彼らに女神への注
意を喚起するように

116 神々と女神たちには供え物を持たらすよう
に
117 彼らが神々の扶養を忘れることのないよ
うに
118 彼らの国を繁栄させ、聖所を建立するよ
うに
119 頭の黒き者たちが神々の前に立つように
120 われわれは挙って彼の称号を唱えよう
彼はわれらが神なり」
(つづく)